

「末っ子」緑夢 頂点



●表彰式で金メダルを手に笑顔の成田緑夢選手（16日午後、韓国・平昌で）＝上甲鉄撮影
○応援に駆けつけた兄の童夢さん（旌善＝チョンソン＝アルペンセンターで）＝鈴木俊也撮影

童夢さん涙「弟誇り」

【平昌＝広瀬誠】「成田3きょうだい」の末っ子が、会心の滑りで世界の頂点に立った。16日の平昌パラリンピック・スノーボードの男子バンクドスラローム（下肢障害者用）で、初代王者に輝いた成田緑夢選手(24)。観客席で見守った兄で元五輪代表の童夢さん(32)は「最高の笑顔だった。弟を誇りに思う」とたたえた。



3回の滑走で一番いいタイムは3回目を最速タイムで、滑走順1番の成田選を待った。金メダルが決まると、「イエーイ」と満面に笑みを浮かべ、両腕を高く掲げてガッツポーズ。

「最高の気分」

競技後のインタビューなどでの成田選手の主な発言は次の通り。
——チャンピオンになった気分は、
「もう最高の気分。それしか出てこない」
——銅との違いは、
「(表彰式で)世界の舞台で国旗を見せ、国歌を流せた。世界に日本を見せられた。」



周囲にいた外国選手から「イチバン」と日本語で祝福された。スノボクロスに銅に続く快挙に「最高の気分と喜びをかみしめた」。「治らないけがをしても、大きな舞台に挑戦する姿は素晴らしい」。童夢さんはそんな思いを胸に、この日、会場に駆けつけて声援を送った。

「けがからの歩みを振り返ると。」「夢みたい。けがした瞬間はスポーツに復帰できると思わなかったが、金メダルがとれた。けがした人や交通事故に遭った人の光になれるんじゃないか。それが一番うれしいこと」
——今後の目標は、
「今は、この優勝というポジションをかみしめることに全力を尽くしたい」

ノボの練習に明け暮れた。童夢さんは妹とともに2006年トリノ五輪のスノボ・ハーフパイプに出場したが、それ以前から「弟のポテンシャル(潜在能力)が一番高いと見込んでいた。童夢さんが大阪市の実家から離れた、長野県で練習していた11年、成田選手から突然の電話があった。「行ってもいい?」。一緒にゲレンデで滑ると、成田選手はスノボのトップ選手が繰り出す大技を軽々と決めた。それを見て童夢さんは引退を決めた。

成田選手は13年4月に左足に大けがを負い、パラリンピック出場を目指すようになった。童夢さんは、長野県で先月開催された国内大会に応援に行った時、成田選手から「一緒に滑ろう」と誘われ、7年ぶりに兄弟で滑った。自分を追い抜いていく弟の姿に、「速いな」とうれしさがこみ上った。

平昌大会ではその言葉通り、普段の力を発揮し、二つのメダルを獲得した。目標は金メダルを取ることではなく、そのことで障害のある人たちに夢と希望を与えることと学生らに語った成田選手。五輪で健常者と競いたいという思いも強かったという。東京出張中の小林理事長には試合後、テレビ電話で「金メダルを取りました。ありがとうございます」と報告があった。小林理事長は「今回の活躍で勇気付けられた人はたくさんいると思う。短冊に書いたように、五輪出場に向け、さらに前に進んでほしい」とたたえた。

「五輪目指しさらに前へ」 理事長



△目指すぞ!!パラリンピック&オリンピック!!!
昨年7月、所属する近畿医療専門学校(大阪市北区)を訪れた成田選手は、短冊にこんな目標を書き込み、玄關の七夕飾りに掛けた。中高生の頃にトランポリンに打ち込み、2002年ロンドン五輪代表の最終選考に残ったほどスポーツ万能だった成田選手。その後、フリースタイルスキー・ハーフパイプで五輪を目指し、13年春には世界ジュニア選手権で初優勝した。だが、その直後にトランポリンを使った練習中に大けが。約2年後、骨格矯正の専門家でもある同校の小林英健理事長(59)の施術を受けた。その縁で、同校は遠征費などをサポートするようになった。成田選手も活動報告のため、月1回程度同校を訪れるほか、柔道整復師などを目指す学生の前で講演することもある。小林理事長は「一言で言うところの好青年。考え方が前向きで決して弱音を吐かない」といい、「学生の前に講演する時は緊張しているが、試合では緊張しないよ」と話す。

本紙が号外発行
読売新聞は16日、平昌パラリンピックのスノーボードの男子バンクドスラローム(下肢障害者用)で、成田緑夢選手が金メダルを獲得したことを伝える号外約4万部を発行した。